

## <英語科> (モデル授業)

意見構築に向けての論理的・多角的に物事を見る力を養うための授業実践  
～経済・環境問題に挑戦!もし、あなたが市長なら…～

---

教諭 荻 窪 雄 太  
教諭 杉 山 美 月

---

### はじめに

昨年度より文科省からの研究指定を受け、「主体的に学ぶ力」の向上を目指し、授業改善を試みている。本年度は、主題が「課題解決に向けた主体的・協働的な学び」から「主体的・対話的で深い学び」に変更され、昨年度培った力を基礎とし、さらなる学力向上へと研究を進めてきた。

本年度は、昨年度培った力をもとに、意見構築のための深い学びとして、論理的・多角的に物事を見る力を養うことを目標とした。

### 1 取組の概要

#### (1) 趣旨

- ア 今まで学んだ英語を用いて、自分の考えを英文にすることができる。(主体性・技能)
- イ 仮定法や比較表現などの文法を正しく理解するとともに、重要語句を身につけることができる。(知識)
- ウ 本文に関する質問に英語で答えることができる。(技能)
- エ 様々な意見を聞くことで、自分の考えを再構築することができる。(対話的で深い学び)

#### (2) 対象

- 2年3組 上位クラス 18人 (男子:8人, 女子:10人)
- 2年3組 下位クラス 17人 (男子:12人, 女子:5人)

#### (3) 計画

##### ア 単元の指導計画

本単元に10時間を配当した。1～3時間目は、登場人物や島の状況など、本文内容の把握に当てた。4～7時間目に“Why was Kate angry?”を中心とした意見の構築やKateの立場からの意見を深めさせる時間とした。同時進行にはなるが、6～9時間目には、“If you were Tom would you continue to promote tourism?”を主題とし、市長である主人公Tomの立場であればこれからの島の未来をどうするかについて考えを深めさせた。10時間目には、今までの意見の総まとめとして、自分の意見を再構築させる時間とした。

##### イ 個人から始まり、全体へ広げ、個人に落とす指導

最終的な個人の学力向上に向けて、本単元を通して、個人で取り組み、ペアやグループ活動で広げ、クラス内で共有し、最後に再度自分で取り組むことを意識した授業改善を試みる。

##### ウ 授業後の意識変化

クラス内発表・討論の導入後の意識変化として、理解・視点・表現の点について調査する。

##### エ 生徒のライティングを元に、模試を意識した定期考査の作成

## 2 研究内容

### (1) 深い学びのための指導

#### ア 既習の英語表現の定着

VISTA English Communication II (SANSEIDO)の Lesson7 The Galapagos Island に関連した自作教材を導入した。本文には、昨年度から今までにおける既習表現や単語を取り入れ、それらの復習・定着を図った。

#### イ 視点の例の提示とブレイン・ストーミング

意見を構築するための指導として、視点の多様化に重点を置いた。始めに一例を示し、一つの物事に対して様々な視点があることを伝えた。次に教材の質問である、“Why was Kate angry?”に対し視野を広げるため、ブレイン・ストーミングを行った。後に、心情・社会・私生活・理想など大きな分類分けをし、意見の傾向に目を向けさせた。(写真1)



写真1 分類分けをしている様子

### (2) ライティング活動の充実

#### ア ライティングの段階的指導

“Why was Kate angry?”と、“If you were Tom would you continue to promote tourism?”のそれぞれに対して、意見を3つ用意させた。どちらの質問に対しても、まず意見を日本語で書かせ、その後その日本語を易しく短い日本語文に書き直させた。そして、最終的にその簡単にした日本語を英文に直すという段階を踏んで指導を行った。

#### イ 英文作成におけるミスの明確化

英文を書く際に注意すべきことを7点に絞り生徒に提示した。それをもとに自己添削を促したり、教員添削の際にはその番号を記入したりして、各自の間違いの傾向を可視化した。定期テストの自己表現問題においても、この基準をもとに評価した。

### (3) 対話的な言語活動

#### ア 発言に対する指導

昨年度培った「自分の意見を述べる」ことに加え、「他人の意見を理解して聞く」ことを単元通しての目標に掲げた。クラス全体で相手が言っていることを理解しようとする姿勢を育み、また、発言者においても、自分の言いたいことを相手に伝えられるよう努力させた。クラス内討論では、賛成派・反対派に分かれ、意見を対立させ、反論を促した。(写真2)(写真3)

また、発表や討論後は自分の活動の様子を振り返らせ、自分ができているものや足りないことについて考えさせた。

#### イ 意見の可視化

「他人の意見を理解する」手助けとして、付箋を使用し、テーマをつけ、まとめさせたり、発現内容を黒板に書いたりすることで、各自が発言した内容を明確にする工夫を施した。



写真2 討論の様子1



写真3 討論の様子2

### (4) 意見の再構築

単元を通して、まず自分の意見を持ち、次にそれをグループやクラス内で伝えたり、クラス内討論などを経て様々な視点からの意見を把握させたりした。最終段階として、それらから得たものをもとに自分の意見を再度見直させ、「If you were Tom would you continue to promote tourism?」に対してエッセイを書かせた。また、それを参考に、模試の形式をとり、意見の要約を選ばせる問題を作成し、定期考査に出題した。

### 3 成果と課題

#### (1) 成果

昨年度の研究目標である「間違ふことを恐れず積極的に英語を活用する」ことの上積みとして、本年度は、自身の意見の構築のため、論理的・多角的に物事を見る力を養うことを目標として取り組んできた。また、既習の英語表現の定着やそれらを対話する際に使えるようための工夫を施した。

事後アンケートによると「①他の生徒の発言をどのくらい理解できたか」については、7割を超える生徒が、ほぼ理解できた・まあまあ理解できたと答えた。授業では、他人の発言に対して聞こうとする態度だけでなく、相手が理解できていない場合にもう一度違う表現で伝えようとしている姿が見受けられた。授業を参観した教員からは、「分からなかった時に、素直に分からないと言える雰囲気がある」という意見も出ており、クラス全体で理解してから次へ進もうという姿勢が備わっていたように思う。

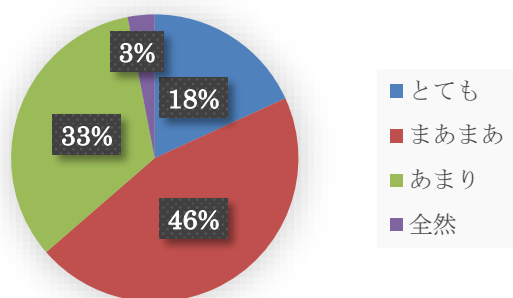
今回の研究内容である視点の観点からは、「②質問に対して、様々な視点で考えることができたか」「③他の生徒の発言を聞いて、他の様々な視点に気づく事ができたか」について聞いた。②では約1/3の生徒が、③では約8割の生徒がとても、あるいはまあまあと回答した。②よりも③のほうができた割合が高いことから、自分で考察することに対して苦手意識を持っている生徒も多いことがうかがえる。ライティング活動においても、生徒の想像だけで成り立っており、本文と結びつきが薄いため説得力に欠ける内容を書く生徒が非常に多かった。個別に直したり、生徒の言いたいことを引き出しつつ助言をしたりと、フォローをしたが、生徒自身の力のみでは、まだ練習が必要であると感じた。

表現の点では、「④発言する際に、今まで習ってきた表現を使用することができたか」「⑤発言を通して、使える英語表現が増えたか」の両質問に対し、約9割の生徒が、とても、または少しできた（増えた）と解答しており、教材の適切な難易度設定やその指導内容であったことがうかがえる。

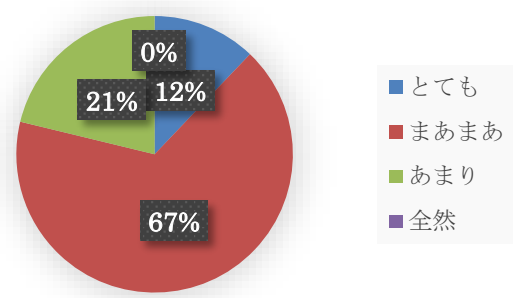
生徒からは、様々な意見が寄せられた。以下は、その一例である。

- 「理解度」
- ・意外と簡単な英語になると理解ができることが分った
  - ・英文を理解してもらえず、より簡単にくずして言うということがまだまだできていない

②様々な視点で考えられたか



③他の視点に気づく事ができたか



- 「視点」 ・自分と違う視点でいろいろなことに気づいていてすごいと思った
- ・反対の意見を聞いて少しはその意見に賛同することができた
- 「表現」 ・相手の意見に反論ができて良かった
- 「話し合い」 ・一つの問題について、いろいろな方面から意見交換し、それが活気づいたとてもいい話し合いになったと思う

各生徒が、この活動を通して達成したことやそれぞれの課題を見つけたことは、今後の成長に期待を持つことができる。

## (2) 課題

単元の最終課題として、他人の意見を聞いて、自分の意見を見直し、再構築することを掲げて進めてきた。各生徒が考え抜いた意見がそろそろ反面、他人の意見と自分の意見を比較し、さらに考え直そうという生徒はまれであったように感じた。他人と比較しても、自分の意見の方が筋が通っていると感じているのであれば問題ないのだが、最終エッセイを提出した際に個人的に聞いてみると、そこまでは至らなかったように思う。自分が精一杯考え、一定の達成感を得られたことで満足したのが原因であると考察した。また考査問題では、4択問題の正答率は約半数であった。英文補充の問題では、ほとんどの生徒が不正解であった。

さらなる深い学びや学力定着に向けて、来年度の課題として取組んでいきたい。

## おわりに

2年間にわたり、従来の一方的な授業からの脱却と、生徒の主体性を重んじた学力向上に向けての授業改善を試みてきた。

1年目は、目指す生徒像を明確にし、生徒にとって親しみやすい授業内容の考案や、各生徒に対しての役割分担、そして英語に対する苦手意識の克服に努めた。2年目はそれに加え、さらに主体的で深い学びへとつながるよう、他人の発言に対する理解、視点の多様化、そして既習表現の活用を目標に進めてきた。

2(3)イにあるような工夫で、発表や討論において生徒の意見を聞き逃すことなく、クラス内で円滑に共有できたことが共感や反感を生み、活発で主体的な活動につながったように思う。またそれに向けた、例の提示や意見交換、添削など毎時間の小さな活動が、積極的に英語を活用する意識向上へとつながったのも一因である。

「今回よりももっと活気のある意見をぶつけ合えるような話し合いのできる授業がしたい」という生徒の意見にもあるように、継続して英語が使いたくなる学びこそが深い学びに繋がるのだということを確認することができた。

- 参考書籍**
- ・ ジョージ・ジェイコブス, マイケル・パワー, ロー・ワン・イン(2005)  
「先生のためのアイデアブックー協同学習の基本原則とテクニクー」(日本協同教育学会)
  - ・ 西岡加名恵(2017)  
「アクティブ・ラーニング 学習発表編(楽しい調べ学習シリーズ)」(PHP 研究所)
  - ・ 水戸部修治(2017)  
『「話す・聞く・書く」でアクティブラーニング! 5・6年生』あかね書房